

連載：原点

## 〇〇っぼい

四街道高等学校 白鳥 あいり

突然ですが、みなさんは家族や友人など、周りの人から「君って、〇〇っぼいね」と言われた経験はありませんか。経験があるという方は、〇〇に入るのはどんな言葉でしたか。たとえば、純情で人懐っこく、和やかな雰囲気をもたらす人は「犬」、年齢、性別問わず、世話好きで悩みや困りごとをいつも解決してくれる人は「オカン」という言葉が入るかもしれません。私の場合、〇〇に入る言葉の多くは「先生」でした。5人姉弟の長女として生まれた境遇からか、小さい頃から家でも学校でも、勉強を教えたり、話し合いの進行を務めては、人や議題をまとめたりすることが多くありました。今思えば、「先生っぼい」という言葉は大変光栄なことですが、当時の私は「先生」という言葉を気にもとめず、人から必要とされることや褒めてもらえることに喜びを感じていました。

その後、高校に入学した私は、「先生っぼい」という言葉に加えて、考え方が「数学っぼい」と言われるようになりました。確かにこのときの私は、算盤を習っていたため、計算することが好きになり、そこから数学が好きになり、最も得意とする教科でした。ですが、その影響が思考回路にまで及んでいるとは思っていませんでした。これらの環境や経験を通して、次第に、「自分には数学の教員という職が向いているのではないか」とか、「自分が好きで、かつ得意なことを仕事にできたらそれは大変幸せなことではないか」と、自分のやりたいことが教員の仕事だと気づいたのです。

以上の経験から、「〇〇っぼい」という言葉には自分に色を付けたり、その色を輝かせたり、あるときには色を変化させたりと、とても柔軟に人を変身させる魔法の言葉のようだと私は感じています。想定内の「〇〇っぼい」は自身の個性を強調し、自己肯定感や自己存在感にもつながります。反対に想定外の「〇〇っぼい」は自分の新しい一面を発見し、新たな個性として自己を確立していきます。私の場合は「先生っぼい」と「数学っぼい」という2つの言葉が教員である私のルーツであり、教員になった今では、私の個性として今後も深く追究し、自身の進化に繋げていきたいと考えています。そのためにも2つの言葉の意味をきちんと理解し、この仕事を通して、自分なりの意義を模索していく所存です。また、様々な「〇〇っぼい」を生徒にも活用することで、学級経営や授業展開等において、個性の発見、変化、強調を促し、生徒が本来の自分でいられる環境作りに精進していきたいと思えます。